竹蓋幸生・水光雅則　編、『これからの大学英語教育：CALL を活かした指導システムの構築』、岩波書店、2005 年、255 p.

西山教行

フランス語教育において CALL (Computer Assisted Language Learning ; ALAO=apprentissage des langues assisté par l' ordinateur) を授業運営に導入し、何らかの成果を上げている教育機関は少なくない。教員が個人の技能と関心に従い教授法改善の一環として取り組んでいるケースもあれば、相応の予算措置に支えられ、組織的対応を強化している機関もある。教育現場へのコンピューターの導入は科学技術の振興に国運をかける日本の基幹的事業に関わることから、現代の教育政策のなかで重要な柱の一つであり、今後、加速度的に進捗の期待される分野でもある。

外国語教育学は、理論と実践の双方向性や学際性を特色とする。本書は、六人の英語教師と六人の執筆協力者による共同研究の成果をまとめたものであり、理論と実践の相互作用や執筆者の多様性という観点から、外国語教育学の好例である。内容は、今後の大学における英語教育のあり方を多角的観点から総合的に考察したもので、副題に掲げる CALL の導入並びにその手法の紹介は、本書全体の取り扱う課題である。その意味で、CALL の技術的側面に関心を持つ読者は、この教授法が外国語教育体系全体のなかに占めうる位置づけやその教育学的特性について学ぶことができるであろうし、これまで CALL にとりわけ関心のない教員であれば、外国語教育体系におけるコンピューター利用の教育的価値を発見するであろう。また、執筆者らの専門は英語学や英語教育学であるとはいえ、その視座は英語に限定されるものではなく、広く外国語教育全般に共通の問題意識にもとづいており、フランス語教育に応用しうる考え方が少なくない。

全体は５章で構成されている。第１章：大学英語教育への提言、第２章：英語教育のシステム的な考え方、第３章：CALL とコースウェア、第４章：学校教育における CALL の活用、第５章：これからの英語教育へ向けて。

第１章は本書全体の導入として、大学英語教育の目的と目標、課題を分析し、提言を行う。日本の大学での外国語教育の位置づけは、実用か、教養か、との二項対立をめぐる議論も完全に整理されたわけではない。学習者は外国語学習に実用性を望むのに対し、教師は依然として教養の価値を訴える。そうした中で大学教育にとっての実用性とは何かという重要な議論が十二分にされ尽くしたとは言い難い。

本書はこの二項対立を統合し、教養を前提とする実用性を提唱し、大学教育においては、外国語を通して教養を獲得し、「感受する」ことこそ肝要であり、実用技能はその実現手段になると訴える。ここでの実用性はあいさつ程度の日常会話に準拠するものではなく、学術を目的とする言語能力の運用を目指すもので、大学教育の理念や実態と不可分の関係にあり、教養教育ならびに学部や大学院での専門教育との連携をはかりながら実現されるものと捉えられている。

このような視座から外国語教育のあり方を見直すと、カリキュラム開発、組織の意思決定、教育実践が検討すべき具体的課題として浮かび上がってくる。ここでのカリキュラムとはシラバスを含む広義で、「言語教育の方針を示した総合的教育計画」であり、その上でカリキュラム計画とは「開発あるいは再編成するための計画や、その実行に関わる意思決定の過程」(p. 28)であるととらえる。具体的には、「言語教育の目的や目標、指導内容、方法、評価について行われる一連の意思決定」を指しており、これは教育機関の外国語教育に対する取り組みをそのまま反映するものとなっている。本書の特色の一つは、大学という組織の意思決定を外国語教育の問題意識として主題化した点にある。

ところで、英語のみならず、外国語教育一般に共通の問題は、クラスサイズ、学生の意欲と学力、教員の質、外国語教育の目的と目標、教育課程としてのカリキュラムなど多岐にわたるが、しかし、ここで問題を分節化せず、総合的教育計画としてのカリキュラムの視点を導入することにより、一連の課題をカリキュラム開発に関する問題と同定することができる。ところが、このような意味でのカリキュラム開発は外国語教育の中核であるにもかかわらず、外国語教師はこの課題に充分に取り組んできたとは言い難い。利害やカルチャーなど、解決すべき問題があまりにも錯綜しているように映るため、教師はこのように交錯する課題に関与することを

避け、授業と研究のみに関わる傾向にある。そこで、対処療法ではなく、問題を構造と原因から改善する方策として、著者は「ソフトシステム方法論」を提唱する。これは、「カリキュラムを一つのシステムととらえることによって、マクロ的な立場から従来の諸問題を構造化し、大学などの英語教育の刷新に向けた英語カリキュラム開発を実現する方策を我々に提供してくれる」(p. 34)ものである。とはいえ、本書はこのような観点から最適化され、完成されたカリキュラムを提供するものではなく、むしろ概念モデルの提示をめざしており、CALL はこのシステムの一環として問題解決の一方策になるとして提唱されている。

第２章はシステム思考を論ずる。ここでのシステムとは、「複数の要素が有機的に関係しあい、全体としてまとまった機能を発揮している要素の集合体」（広辞苑）を意味するもので、外国語教育を構成する諸要因を総合的に考察する方法論といえる。これによると、英語教育総合システムは、教育の全体像を統括する「包括システム」、学習者の興味や能力のバラツキに対応する「集積システム」、語彙力の養成に関わる「複合システム」、聴解力の養成に関わる「中核システム」により構築され、この一連のシステムは包括システムを上位とし、一種の入れ子構造になっている。これは聴解力の効率的な養成をめざすとともに、その定着を図り、他技能の向上に寄与する基礎力に結びつくもので、学習の効率化、学習意欲の向上、教師不足や授業時間の不足を補うカリキュラムの総合的計画の構築を可能とするものである。

第３章はこのような視点からの CALL の導入とコースウェアを論じる。CALL の歴史を踏まえて、その特色を類型化すると、CALL は外国語教育すべてを置き換えるものではなく、あくまでも学習時間の不足を補うものであり、その効果が十二分に発揮されるのは、高い効率を確保するカリキュラムと、学習者の意欲への働きかけを行う教師の協働によることがわかる。これを前提として、CALL 教材の作成に不可欠なコースウェアの開発方法を検討する必要があるのだが、ここでもシステム論が参照される。著者は、聴覚力こそがコミュニケーション能力向上の基盤になると力説し、聴覚力向上をめざすコースウェアを提示する。

第４章は、大学、大学院のみならず、中高における CALL の活用例を紹介し、中核システムとしての CALL による学習成果を検証する。様々な要

因がCALLによる学習の成功や不成功に結びつくのだが、学習者に対する教師のケアの質がこの教育システムの正否を分ける点であることに留意したい。教師は、これまで以上に、評価者、単位認定者、学習アドバイザーの側面が強くなり、動機付けへの働きかけを行うことが重要になる。実際のところ、音声言語や異文化に関する教師からの情報提供が、学習者の意欲向上に役立つと実証されている。

第５章は今後の英語教育観の方向性や教育体制を論じ、本書全体の総括となっている。

フランス語教師が本書に学ぶべき点は少なくない。聴覚力を基礎と定めた学習指導システムの構築もその一つにあげられる。しかし、外国語教育を大学教育全体に有機的に統合し、組織の意思決定の視座から教育のあり方を刷新するという提言こそもっとも耳を傾けるべきである。

このような教育改革構想全体を貫く著者たちの基本的姿勢は次のようなものである。「しっかりと準備してから行えば実験は失敗しないはずだ。効果が上がらないとわかっている伝統的な手法で指導を続けるより、実験的指導を導入することはむしろ学習者に対して良心的な態度だ。」(p. 150)教育に対して高い良心を保つことは、研究に対する場合よりも、しばしばより困難となるが、本書には教育研究者に求められている高潔な職業倫理の一端をもうかがうことができる。

教授法のみならず、制度改革へも踏み込みながら、外国語教育のあり方の改善を模索する関係者に本書を是非お勧めしたい。

（京都大学）